

大衆時代を予見した K.レオンチエフと Ф.ドストエフスキーの思想

法学部政治学科4年 安部良貴

はじめに

1. 19世紀ロシアの政治・社会状況と思想の生まれる背景
2. レオンチエフの「反動」政治思想
3. ドストエフスキーの民衆観と政治思想
4. 20世紀以降の展開と両者の思想の先見性

おわりに

はじめに

本論は、現代の民主政治の抱える思想的課題を提示し、それをどう解決していくかの道筋を示すことを目的としている。そして、その検討において、コンスタンチン・レオンチエフ(Константин Леонтьев 1831-1891)とフョードル・ドストエフスキー(Фёдор Достоевский 1821-1881)という2人の思想家を取り上げ、従来はナショナリスティックで反動的傾向が強いと考えられていた両者の思想が、実は時代を先取りしている面があり、現代の政治思想の更新に役立つものではないかと考え、両者の思想の可能性を探るものである。

現代の民主政治の抱える問題とはなにか。それは、西欧流の、理性を持った人々による討議の積み重ねで意思決定をおこなう仕組みが、多様な欲望が存在し、複雑化する社会に対応できていないことにある。これは、特定の国に限った事象ではなく、民主制度を取り入れておるあらゆる国で起きていることである。民主政治というのは、自明なものではなく、どのように維持していかななくてはいけないかが問われているのである。

理性に基づいた民主政治は、現代においてその限界の兆候を様々なところで露呈させている。たとえば私たちは、自国政府の政策の1つ1つについて詳しい意見を持つことは不可能である。したがって、たとえば消費税を上げるのが果たして有効かそうでないか、ということを表示することは、専門家でない限り偏った知識から意見を表明することに他ならない。また討議によって人々の利害を調節し合おうとしても、話し合いのテーブルにすらつかない(あるいはつけない)人がいる際にはどうすればよいのだろうか。現代の政治思想はこれらの問題について、未だに解決策を見いだせていない。

そこで、一旦時代をさかのぼり、先述したレオンチエフとドストエフスキーの2人が生きた時代にスポットライトをあててみたい。2人を取り上げる理由は、彼ら独自の民衆観や平等思想が、現代の政治思想を考察する上で、再考するに値するからだ。本論では、両者の思想や考え方が、前述した問題を解決策する糸口を見いだすきっかけになると考えているのである。

2人が生きた19世紀半ばから後半にかけてのロシアでは、西欧派とスラブ派という2つの大きな思想グループが対立状況にあった。基本的に、西欧派は、イギリスやフランスなどの西欧諸国に比べて遅れたロシアの制度や産業を、西欧流のものに改革しようとするを基礎として、ロシアを西欧諸国に並ぶ先進国家へと変貌させることを理想とする思想を持つ人々のことである。これに対してスラブ派は、西欧派の考え方に反発し、ロシアには正教などのロシアの原理があり、西欧とは異なる独自の路線を歩むべきだと主張した人々のことだ。西欧か、ロシアか、という対立が、国の行く末を占う重要なテーマだったのである。日本における似た事例として、明治30年代の欧化主義（井上馨ら）と国粹主義（高山樗牛ら）の対立が挙げられる。西欧と接触した「辺境」の国々が共通して経験する現象であろう。

レオンチェフとドストエフスキーの思想は、両派の思想とは異なるものであったが、あまり特別な区別はなされてきてはこなかった。一般的には、レオンチェフもドストエフスキーも、決して西欧派と評されることはなく、スラブ派に区分されていることが多い。¹しかし、ロシア思想の研究で著名な哲学者ニコライ・ベルジャーエフ(1874-1948)は、西欧派、スラブ派のどちらとも異なる面を多くもつ思想家として、レオンチェフとドストエフスキーを挙げている。ベルジャーエフは「ドストエフスキーは、言葉の伝統的な意味でのスラヴ民族主義者ではなかった。コンスタンチン・レオンチェフもスラヴ民族主義者ではなかったように。これらは新しい型の人間である」²と述べ、両者をこれら西欧派やスラブ派からはっきりと区別しているのである。

ベルジャーエフは、彼らを「新しい型」と評した理由に、両者の西欧への一定の評価を挙げている。

ドストエフスキーやK・レオンチェフのような型のロシアの宗教思想家たちは、西欧の偉大な文化を否定しなかった。³

レオンチェフやドストエフスキーの姿勢は、西欧派にもスラブ派にも奇異に映った。なぜなら、西欧派にとってスラブ派は、普通西欧の価値を下に見ている人々であり、またスラブ派の間でも、西欧の価値を高めるような発言は、あまり受け入れられるものではなかったからだ。レオンチェフもドストエフスキーも、当時としては分類することや理解することの難しい特異な思想をもっていたようである。

では、何が2人の大きな特徴であるのか。ベルジャーエフの引用文の続きをみてみよう。

彼らはこうした文化にたいして、同時代のヨーロッパ人にまさる尊敬を感じていた。彼ら

¹ たとえば言語学者のトルベツコイや思想家のローザノフは、レオンチェフをスラヴ主義者としている。詳細は清水昭雄「K・レオンチェフ研究小史」を参照

² ニコライ・ベルジャーエフ『ドストエフスキーの世界観』p. 208

³ 同上 p. 213

はただ同時代のヨーロッパ文明、その《ブルジョワ的》・俗物的な精神をしりぞけ、それはヨーロッパ文化の過去の偉大な伝承や遺産にたいする裏切りであると指摘しただけなのだ。(中略)俗物的文明の精神は、文化のキリスト教的根源からの離反の結果、優位を勝ち得はじめる。唯物主義の精神は宗教性の精神を圧倒し、地上的財宝による奴隷化が天をおおいかくす。これが、近代文明のあまねき傾向である。⁴

ここでは、西欧か、ロシアかという二項対立よりもむしろ、宗教的精神か、俗物的精神かという対立が重要なものとされているのである。ベルジャエフの指摘は、レオンチエフとドストエフスキーが生きた時代、すなわち 19 世紀半ばのロシア社会が、「ブルジョワ的」大衆社会の萌芽であるということを示しているといえる。なお、「民衆」と「大衆」という用語は、どちらも国家を構成する均質的な集団としての意味があるが、前者が主に政治主体となる存在で、古くから使われていた言葉であり、後者は主に 20 世紀以降登場した、匿名的で、市民とは異なり理性的政治主体ではないとみなされている、という違いがある。筆者は、レオンチエフとドストエフスキーが、同時代の多くの知識人があまり深く考えていなかった、ロシアの大衆社会化を前提にしており、そこから新しい政治思想を生み出そうとしていたということに注目しているのである。

なぜこの 2 人の思想を検討することに価値があるのか。ロシアという国は、日本では「欧米」や 19 世紀から 20 世紀初頭にかけては「列強」のくくりに入ってしまうことが多いが、実は西欧からみれば辺境の地にあり、ロシアもまた日本と同様、西欧の文明を自身の文明とどう折り合いをつけるかで苦悩してきた国なのである。⁵西欧的な社会システムの導入、そしてその影響としての「俗物的な精神」の流入による大衆社会化と、自国に根付いた精神とをどう結びつけるか。この問題を考えることによって、二人は西欧的な考えの枠組みから距離をとり、現実にもどのような政治思想が適切であるかという姿勢で政治思想を考察することができた。この点において、レオンチエフとドストエフスキーの思想は、本論のテーマである西欧流の民主政治が抱える課題をどう解決していくかという問いにつながると筆者は考えているのである。

本論の構成は、以下の通りである。はじめに、西欧派、スラブ派の両思想グループが、どのような社会状況のもとに誕生したかを、歴史を辿って明らかにする。続いて、レオンチエフ、ドストエフスキーの思想を考察し、大衆社会化するロシアの状況をどう捉え、その中でいかに思考していたかを明らかにする。最後に、それまでの考察をまとめ、20 世紀以降の社会の動向、そして政治思想を検討する材料になるかどうかを考える。

なお、以下の論稿においては、特に断りのない場合、ロシア語文献の翻訳は筆者によるものである。また、文中敬称はすべて省略した。

⁴ 同上 pp. 213-214

⁵ そのことは、現代のロシアにおける「ロシアにはロシア独自の民主主義がある」といった主権民主主義などの議論にも如実に現れている

1. 19世紀ロシアの政治・社会状況と思想の生まれる背景

前述したとおり、ドストエフスキーは1821年に生まれ、1881年に亡くなった。レオンチエフは1831年生まれ1891年没である。ニコライ1世の治世（在位：1825-1855）からアレクサンドル2世（在位：1855-1881）が暗殺され、アレクサンドル3世（在位：1881-1894）が即位するまでの時期にはほぼ合致していることが分かる。本章では、2人の思想的背景である19世紀ロシアの思想的状況、つまり西欧派とスラブ派の登場に主眼を置きつつ、当時の歴史を振り返る。

1-1. フランス革命の衝撃

19世紀ロシアは、フランス革命という大事件の影響にどう対処するかという問題で幕を開けた。具体的には、西欧諸国のような、法と中央機構が整備され、国民統合が進んでいる近代国家の確立という課題が本格的に浮かび上がってきたのである。⁶ときの皇帝であるアレクサンドル1世（在位：1801-1825）は、当初自由主義的で開明的な改革を模索した。ロシアが近代国家となるための最大の障害は農奴制と教育の未発達であった。アレクサンドル1世は農奴制を緩和する勅令を公布し、少しずつではあるが高等教育機関を設置するなど、根本的な改革を行おうとしていた。だが、1812年に大陸封鎖令を破ったロシアへフランス軍が侵攻する、いわゆる祖国戦争が勃発すると、改革は中断してしまった。

このナポレオンとの戦争を通じて、ロシア国内に愛国的感情と自由主義的価値観が広まった。これらはのちにそれぞれナショナリズムと革命思想につながり、スラブ派、西欧派の成立に大きな影響を与えることになった。なかでも最初に影響を受けたのは、パリへ行軍した青年将校たちだった。国王を処刑して新しい体制を立ち上げたフランスの状況をみた将校たちは、デカブリストの乱（1825）という自由主義運動を引き起こしたのである。

ニコライ1世（在位：1825-1855）は、デカブリストの乱に大いに怒り、これを鎮圧した。自由主義がはびこっていることをみてとったニコライ1世は、1833年から1849年まで文部大臣を務めたセルゲイ・ウヴァーロフによって唱えられた「正教、専制、国民性（農奴制などのロシアの伝統的な体制や習慣）」の3原則を不可侵なものとして強調することで、国民の一体感を演出しようとした。いわゆるリベラリズムの弾圧と専制擁護によるナショナリズムの強化であるが、これはナポレオン戦争後のウィーン体制に参加した国に共通してみられた現象であった。特に1848年のフランス二月革命以降、出版物への検閲が強化され、自由主義的な思想に対する抑圧が極まった。文学者の受難は数知れなかった。ドストエフスキーが逮捕されたペトラシェフスキー事件（1849）はこの時期に発生し、ツルゲーネフも農奴制を批判した廉で逮捕された。さきほどのウヴァーロフですら自由主義的であるとして罷免される有様であった。

こうしたニコライ1世の徹底した専制を支えたのは、ロシア経済の発展だった。この時期、イ

⁶ 藤本和貴夫／松原広志編著『ロシア近現代史 ピョートル大帝から現代まで』ミネルヴァ書房、1999、p. 32

ギリスが穀物法を廃止（1846）し、穀物輸出が飛躍的に伸びたことで、産業の発展が進んだ。鉄道建設も盛んになり、1851年にペテルブルグ～モスクワ間の鉄道が完成した。道路や線路など交通インフラの整備は、国土が大きすぎるロシアの商業の活性化に不可欠なものであった。都市の住民も増加していった。農奴制は残り続けたが、経済は着実に成長していたのである。

1853年から始まったクリミア戦争の敗北は、ロシア社会の脆弱さを明らかにし、政府や国民にさらなる改革、経済発展を求めさせることになった。東方問題によってイギリスやフランスとの対立が生じ、オスマン帝国との聖地管理権のもめ事から開戦したものの、実質的にはイギリス・フランス連合軍との対決となったクリミア戦争は、セヴァストーポリ要塞が陥落するなど完敗を喫した。西欧列強と比して、近代産業の未発達、道路や鉄道の未整備、兵器の後進性などは明らかであった。改革はますます喫緊の課題となっていったのである。

1-2. 思想の隆盛と西欧派スラブ派の誕生

デカブリストの乱とその後のニコライ1世の弾圧によって政治に関わるのが難しくなった知識人層は、内面的な問題を取り上げはじめた。たとえば、近代的発展を遂げていくため、ロシアは何をすべきか、といった問いに答えるような動きが、哲学的な思索の活況を生んでいったのである。折からの経済発展による国力の増加、教育を受けた人の増加も、この流れを後押しした。

西欧派とスラブ派という2つの世界観が生じたのもこの時期であった。両派の論争の嚆矢は、1836年にピョートル・チャアダーエフ（1794-1865）の『哲学書簡』が出版されたときとされている。『哲学書簡』は、ロシアは人類の歴史から取り残されているなどといった、ロシアを痛烈に批判する内容で、検閲官の怠慢によって出版された。西欧のように発展するか、ロシアとともに没落するかという内容の『哲学書簡』は、ロシア西欧化の出発点であるピョートル大帝（在位1684-1725）以来のロシアの動きを捉え直させるきっかけとなったといえる。

ピョートル大帝の改革の是非、すなわち西欧に対して開かれるべきか（西欧派）、その反対としてロシアの独自性を貫くか（スラブ派）、という対立が、ピョートル大帝以来のロシアの歴史を振り返る中で、ロシアの行く末を占う大きな焦点になっていき、その論争が歴史のなかで繰り返される環境ができあがった。⁷

たとえば、西欧派であるヴィッサリオン・ベリーンスキー（1811-1848）は、1839年から雑誌『祖国雑記 Отечественные записки』への執筆を中心に活動を開始し、『ゴーゴリへの手紙』（1847）の発表によって、農奴制や正教からの脱却を説く啓蒙主義の伝統を西欧派インテリゲンツィヤのなかに根付かせた。スラブ派では、アレクセイ・ホミャコフ（1804-1860）が活躍した。ホミャコフは、資本主義や社会主義のロシアへの流入を危惧したため、ミールというロシ

⁷ 大帝生誕200周年の1872年にピョートル大帝関連の様々な行事が開かれたが、西欧派の一人である哲学者のウラジーミル・ソロヴィヨフは、その行事のなかで「近代ロシア」を誕生させたとしてピョートル大帝の改革を評価している。逆にスラブ派は、ロシアの文化的一体性を破壊したとしてピョートル大帝以前のロシアを探究しようと呼びかけた（土肥恒之『図説帝政ロシア 光と闇の200年』河出書房新社、2009、p. 21）

アの農村共同体を重視し、正教を擁護するなどの言説を展開した。この活動は後にソロヴィヨフやコンスタンチン・ポベドノスツェフ（1827-1907）などに影響を与えた。西欧派やスラブ派の思想的基盤は、1930年代から40年代に固まったのである。

1-3. 農奴解放と諸改革

1856年のパリ条約締結後、国内には改革の機運が高まった。1855年のニコライ1世の死後帝位に就いたアレクサンドル2世（在位：1855-1881）は、ロシア近代化の桎梏である農奴制の問題に手をつけた。その成果が1861年に発表された農奴解放令であった。

農奴とは、移動の自由が制限され、領主によって支配されていた農民のことである。農奴解放とは、彼らに土地を供与し、地主の支配から脱却させることであり、産業社会の自由な市民を創出するために不可欠の作業であった。

農奴解放によって、農奴たちは、領主が持っている土地を買い取ることが可能になった。ところが、政府が一定の資金を肩代わりしてくれるとはいえ、しばらくは領主直営地での労働という形で引き続き領主に対して義務を履行することになった。また、農民は土地の買い取り金と人頭税の支払いによって出費がかさんでいたにもかかわらず、農奴解放によって分与された土地は、豊かな土地ではないことが多かった。つまり、法的地位は改善したものの、農民の実際の困窮は持続していたのである。1880年代には土地支払い金の減額と人頭税の廃止がおこなわれるが、農奴解放は農民の生活を貧しくさせただけだと思界から批判され続けた。だが、農奴の法的地位を保障したことは、ロシア史において画期的なことであった。

アレクサンドル2世は、1864年に「ゼムストヴォ」を設置し、司法改革をおこなう、74年に国民皆兵制を導入するなど、引き続き大きな改革を続けた。この一連の改革には、いずれも貴族と農民の階級差をこえて、等しく市民＝国民を創出しようという試みがあったといえる。

ゼムストヴォとは地方自治組織のことである。この組織は、知事の監督下にあったとはいえ、農民の行政参加が初めて本格的におこなわれた場であった。司法改革では、司法の行政からの分離などもおこなわれたが、上述の試みを踏まえた上で重要なのは陪審員制の導入であった。陪審員制によって農民が司法に参加可能になったことは、社会に変革を実感させる出来事であった。国民皆兵では、21歳以上のすべての男子に兵役が義務づけられた。それまで読み書きができなかった農民たちは、軍隊で初めて教育を受けて読み書きを覚えた人も多かった。⁸こうして、近代国民国家的な制度が整えられていき、農民の社会進出が進んだ。

経済面での成長も続き、社会構造が変わろうとしていた。鉄道建設は続けられ、国内の鉄道全長が994キロだったのが、1865年に3500キロ、1874年に18200キロとなった。⁹軽工業生産は伸び続け、綿織物工業の成長が著しかった。石炭産業も発展し、採炭量が大幅に増加した。1860-1870

⁸ 栗生沢猛夫『図説ロシアの歴史』河出書房新社、2010、p. 95

⁹ 土肥『図説帝政ロシア』p. 70

年代は好況期でもあったため、ますます都市労働者が増え、貴族でも農民でもない雑階級の人々が増加した。

1-4. 改革が思想に与えた影響

一連の大改革と社会変動を通じて、思想を担う主体も徐々に変化していった。ツルゲーネフの『父と子』(1862)に象徴されるように、19世紀前半には「父」の世代の貴族出身インテリゲンツィヤが活躍したが、19世紀後半「子」の世代には、小領主、官吏、聖職者、商人層など雑階級の人々が中心となった。「子」の世代は高等教育を受けているものが多く、実利主義的で、専制のような旧来の価値観を否定することが多かった。社会主義思想やテロリズムが流行したのもこの世代であった。実際、1881年には、過激な行動派である「人民の意志」党によって、皇帝アレクサンドル2世が爆弾によって殺害されてしまう。この時代は、伝統的な価値観からすれば、模範とすべき「父」が存在せず、どのような社会をつくるべきかが不透明な状態であったといえる。

1863年、西欧派のニコライ・チェルヌイシェフスキー(1828-1889)は『何をなすべきか』を出版した。人間理性をもった強靱な人々による革命を志向したこの本は、1870年代以降の、民衆の理想にそった平等社会を実現しようとする運動、いわゆるナロードニキ運動の走りとなった。ロシア帝国期に民衆とは、ほとんど農民のことを指していたため、当然この運動は農民の共同体に基盤を求めることになった。ナロードという概念は、西欧派にとっては社会主義革命を担う主体として受け入れられ、これ以降の社会運動の際に欠かせない概念となった。

一方、この時期のスラブ派の動きとしては、セルゲイ・レヴィーツキイ曰く、「初期スラブ派のばあいは、ナショナリズムが正教に従属していたのにたいし、その後の追従者たちのばあいは、ナショナリズムの要素が否応なしにますます重視」¹⁰するという主張が増えていった。ニコライ・ストラーホフ(1828-1896)は、ナロードニキ運動のような啓蒙主義に反対し、西欧に浸食されていない生きた道徳原理をもった民衆との接触こそが大切だとなえ、ロシア民衆の原理の独自性を賛美した。ストラーホフらの主張は、ロシアの国民的土壌を重視していたという点で、「土壌主義」と呼ばれるようになった。

ロシアでは、国民国家を築くにあたって、政府に対抗する社会の形成が進まなかった。国家と民衆の間に立ちながら苦悩するインテリゲンツィヤにとって、民衆に期待を抱くのは、いわば必然の流れであった。¹¹だが、ナロードニキ運動が失敗したことからも分かるように、民衆という存在に仮託して幻想が語られることがしばしばあったため、本当の民衆をみていないという批判の応酬が続き、実際の民衆はしたたかに生き続けるという構図があった。インテリゲンツィヤと民衆との乖離が、その後のロシア思想界の大きな問題となっていくことになった。

¹⁰ セルゲイ・レヴィーツキイ『ロシア精神史』pp. 137-138

¹¹ 「人民の意志」党などはまさに名前から民衆を基盤としたい願望があらわれている

フランス革命の衝撃は、ロシアに様々な思想の種をばらまいた。ニコライ 1 世の圧政とクリミア戦争の敗北は西欧派とスラブ派の誕生を促した。1860 年代からのアレクサンドル 2 世による改革は、大きな社会変動を引き起こし、農奴や貴族でない雑階級人を増加させた。

こうした思想界を背景として、保守反動主義的な主張を繰り返していたのが、次章に取り上げるレオンチエフであった。次章では、レオンチエフの思想を紐解き、それがどのような「反動」の内容であったのかを考察していく。

2. レオンチエフの「反動」政治思想

レオンチエフとはどんな人物であったのか。レオンチエフの評伝を書いた高野雅之によれば、19 世紀後半のロシアでは、レオンチエフは「極端に保守主義的で反動的な政治的見解」を持ち、「非難され、無視されてきた」人物であった。レオンチエフは、君主制や貴族階級を愛し、フランス革命以来の西欧の理念である平等社会、自由主義に断固反対を唱えていた。現代の目からみても、保守反動的と捉えられてもおかしくはない。

しかしレオンチエフの思想は、そのような否定的評価とは別の視点から捉えた場合、非常に意義あるものになると考える。具体的には、平等思想が社会に何をもちたらずかを時代に先駆けて考察した人物としてレオンチエフを捉え、その思想を検討していきたい。

2-1. レオンチエフの思想と展開

レオンチエフの思想は、ギリシャやルネサンス（「精神的に素晴らしい時代」¹²）などの文化を賞賛して、西欧文明への高い評価を行ったかと思えば、「今日の文化的独自性は、政治的自由のためにあらゆる場所で死んでいく。個人主義が人間、地域、民族の個性を殺しているのである」¹³と述べ、西欧の平等主義・進歩主義思想への批判をおこなう、また正教に帰依するなど、両派のどちらともつかない行動が目立った。

このことが、レオンチエフが生きた当時における無理解を招いた。¹⁴主に西欧派からは、変革を拒むただの反動主義者とみられ、彼らがレオンチエフの意見に耳を傾けることはなかったようである。特に、平等思想を批判していた点は、それだけで無視されるに値したことであった。詳しく 2-3-1 で検討するが、レオンチエフは、「平等 (равенство)」という考え方の解釈について、同時代の知識人とは異なる考え方をもっており、そもそもレオンチエフと同時代の知識人との議論が成り立たなかったようである。

以下では、レオンチエフが発展させた自身の美学、そしてそこから派生して誕生した歴史観、

¹² Константин Леонтьев, Плоды национальных движений на православном Востоке
http://knleontiev.narod.ru/texts/plody_na_vostoke.htm

¹³ Константин Леонтьев, Избранные письма В.В. Розанову
http://knleontiev.narod.ru/texts/pisma_rozanovu.htm#a

¹⁴ 高野雅之『ロシア「保守反動」の美学-レオンチエフの生涯と思想』p. 8

宗教観について、それぞれみていこう。

2-1-1. 美学

レオンチェフの思想は理解することが難しいと述べたが、では、どういった点が異質なのだろうか。多くの研究者が述べている通り、レオンチェフの最大の特徴は、独自の美学を思想の根本においたことであるといえる。¹⁵彼は同時期を生きた思想家ヴァシーリー・ローザノフにむけて、このような内容の手紙を送っている。

私は、美学こそが、どんな時代や地域にもあてはめることができるので、歴史や生を評価する最高の尺度だと思っています。¹⁶

ではその美学とは何か。それは、複雑性、多様性を尊び、一様性（たとえば、似たような生活、似たようなものへの憧れ、似たような環境など）を嫌悪するという世界観であった。たとえば、1892年の「ロシア通報」に記録された、民主主義を信奉する思想家ピオトロフスキーとの対話では、そのことがはっきりと表れている。

（筆者註：レオンチェフの台詞）「あなたは、世界中の人間がみな、一様にこじんまりして、こぎれいで、居心地のよい家に住むことを望んでいるのですか？」

「もちろん、それ以上によいことがあるのでしょうか？」

「それなら私は、もうあなた方の仲間ではありません！もし民主主義の運動が、そんな恐ろしい無味乾燥な状態へ導いていくのなら、私は民主主義にたいする自分の最後の共感を失ってしまいます。」¹⁷

レオンチェフは、「卑俗で平凡なものへの嫌悪感、優美で洗練されたものや神秘的なものへの憧れ」¹⁸を中核とする、貴族的な価値観をもっていたのである。「…すべてを〈ブルジョワ〉という共通のものへと還元することを本質的に求める」¹⁹中流階級を批判するレオンチェフの発言も、似たり寄ったりの集団が多い社会ではなく、差異や個性が豊かな社会を好んでいるという証拠であろう。

この美学を基礎として思想を展開させていることが、レオンチェフと、主として道徳的価値観

¹⁵ 哲学者のソロヴィヨフは早くから、レオンチェフの世界観には、美学・社会思想・信仰の要素が複雑に絡み合っていると指摘している。清水昭雄「K・レオンチェフ研究小史」p. 5 参照

¹⁶ Константин Леонтьев, Избранные письма В.В. Розанову
http://knleontiev.narod.ru/texts/pisma_rozanovu.htm#a

¹⁷ 『ロシア「保守反動」の美学-レオンチェフの生涯と思想』pp. 70-71

¹⁸ 『ロシア「保守反動」の美学-レオンチェフの生涯と思想』p. 37

¹⁹ Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 214

や宗教的価値観をもとに考えを展開する思想家（たとえば「農奴制は小作農を苦しめる制度だからやめるべき」とする考えを持っている人）との異なる点であるといえる。レオンチェフは政論家、宗教思想家など多くの側面をもっており、また反動主義者、ペシミストなど様々な評価を下されているが、一貫しているのは美学であり、これが後にみる歴史観や宗教観につながってくるのである。

2-1-2. 歴史観

レオンチェフの思想は、この唯美主義に導かれ、独自の歴史・社会思想を發展させてゆく。この思想には、美学という感性的な基準とともに、自然科学の知識が導入された。どういうことか。

レオンチェフは、各民族や国家などを、生物と同様一種の有機体であるとみなし、生物界の法則をあてはめていった。つまり、生成し、発展し、衰退して死に至るという流れを、民族や国家の歴史に適用していったのである。²⁰この場合、発展とは、「錯綜した複雑化の現象」²¹であり、単なる拡大を意味するものではなかった。

有機的生の諸現象をより詳しく眺めるならば、その観察から得られる発展の概念は、有機的生における発展の過程とは、最も単純なものから最も複雑なものへの漸次的上昇、漸次的個性化である、ということだ。一方では外部の世界から、他方では類似する同種の有機体やすべての類似する同種の諸現象からの独自化。無個性と単純性から、複雑性と独創性への漸次的推移。構成諸要素の漸次的複雑化、内的な豊かさの増大と同時に統一の漸次的強化。だから、有機体のみならず、一般に有機的諸現象における発展の最高点は、内部的な専制的統一によって結合されたより高い度合いの複雑性である。²²

ここでは、多様性の統一されている状態こそが、有機体の発展における最も輝ける状態なのだと述べられている。ということは、有機体が衰退していく過程では、多様性が崩れ、均一な状態に向かう状況が生じるとレオンチェフが考えていることは、容易に想像がつかだろう。実際、レオンチェフは次のように述べている。

最終的な死滅を前に、各部分や全体の個性化は弱まる。死滅しつつあるものは、内的に単調になり、環境により接近し、そして自己と同種の近接する現象と次第に一致するように（すなわち、より節度のない状態に）なる。²³

²⁰ 生物学的知識を文明論に応用した先駆者として哲学者のニコライ・ダニレフスキー（1822-1885）がいるが、レオンチェフはダニレフスキーの影響を大きく受け、それをさらに發展させていった

²¹ 勝田吉太郎「反動思想の一類型-K・レオンチェフの政治哲学-」p. 14 なお傍点は勝田による

²² Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 180

²³ Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 182

レオンチェフは、以上の考えをまとめ、有機体の発展と解体過程を3つの時期に分けている。それは、①初期単純性の時期、②繁栄した複雑性の時期、③第2次単純化の時期という3段階だ。国家や社会などは、最初に発生した際はいずれも単純であり、構成要素間に目立った差異はみられない。だが、それらが発展していくにつれ、それらの構成要素の間にいくつもの差異が生まれ、多種多様な要素があふれる繁栄の時期となる。やがて、差異がある状態が嫌われ、均一こそ理想の状態とされるようになり、再び諸要素が混ざりあって単純な状態に戻る。

以上の視点をもとに、レオンチェフは19世紀後半の世界をどう捉えたのだろうか。レオンチェフは、西欧世界を「第2次単純化」、つまり第3期にあたりとみなした。レオンチェフにとって、西欧発展の頂点は、ブルジョワ登場以前のギリシャやローマ、ルネッサンスの時代であり、ダンテやシェークスピアを生み出した時代にこそあった。²⁴その当時のヨーロッパは、封建制度、貴族制度が最も強力な時代であり、身分の違いがあることが当然の社会だった。その時代を、レオンチェフは当時のヨーロッパを以下のように描写し、賞賛している。

精神において、文化的小よび生活上の理想において、統一されてはいるものの、国家の利益においては分裂していたヨーロッパは、そのためにより多様であり、同時に調和的だった。というのも調和とは、平和なユニゾンではなく、実り豊かで創造力を伴った残酷な闘争だからである。²⁵

レオンチェフによれば、19世紀の西欧は、逆に、人権宣言(1789)などからはじまる平等主義に毒され、多様性よりも均一性を重視した社会を志向している。そのため、この時代の西欧人の進歩主義的な楽観主義とは逆に、西欧社会は有機体としては衰退傾向にあるというのだ。

どんな有機体にとっても多様性があるときに生命力の最盛期であるのに、一様性への志向を持つ西欧を、レオンチェフは醜悪と見なして嫌悪していた。だが厄介なことに、西欧文明は自分たちの民主主義・自由主義・立憲主義などを普遍的な価値のある思想とみなし、世界に広めようという姿勢をもっていた。その影響力は次第に拡大し、ロシアでも自由主義者、民主主義者は大きな勢力となりつつあった。

レオンチェフの認識によれば、西欧思想の勢力に対抗するはずのスラブ派も、平等主義に飲み込まれてしまっていた。スラブ派は、セルビア人やブルガリア人を同じスラブ人だとして自分たちと同一視していたが、文化や歴史的差異を無視してスラブ民族という枠の中に入れてしまう発想は、レオンチェフにとって西欧の一様性的思考の支配の現れであった。以上のような事から、レオンチェフは西欧だけでなく、ロシア人社会も徐々に均一化の波にのまれはじめていると危惧し、ロシアを「死なせない」ためにどうすればよいかを考察したのである。これについての詳細は2-3-2で述べる。

²⁴ Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 183-184

²⁵ Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 205

2-1-3. 宗教観

美学から発展した思想のなかで、もう1つ特徴的なのが、独自の宗教観である。レオンチェフは正教を信仰していたものの、自身の美学との兼ね合いから、その宗教観は複雑なものにならざるをえなかった。レオンチェフの宗教観について、ドストエフスキーはコンスタンチン・ポベドノスツェフ²⁶に宛てた手紙の中でこう述べている。

原文
レオンチェフは結局のところすこしばかり異端者のようです—それにお気づきになりましたでしょうか？（中略）彼の考え方にはおもしろい点がたくさんあります²⁷

ドストエフスキーに「異端」と言われてしまうほど、レオンチェフの宗教観は異質だったといふことだろうか。以下では、レオンチェフの宗教観についてみていこう。

清水昭雄は、「すべての人々が愛し合う世界は可能か」という論文の中で、レオンチェフの正教認識を次のようにまとめている。

- a) キリストも使徒もこの世において「すべての人々が愛し合う」幸福な社会を約束していない。地上ではこの世の終わりまで人々の反目が続く。
- b) その社会（筆者註：この世の社会）において、愛は一時的で、治癒的な意味しか持たない
- c) 愛よりも高い意味を持つのは神への畏れである。人は神を畏れることによって自らの罪性を抑えることができるのであり、傲慢な理性の企てに対して謙遜な態度がとれるのである。
- d) 愛、畏れそのいずれの中心にあるのが教会、修道院であり、それらから離れた自分勝手な正教（キリスト教）理解と実践は危険である。教会制度、修道院制度の権威の中においてのみキリスト教者として正しいあり方が可能である。²⁸

レオンチェフによれば、本来人間は不完全であり、全人類が一様に幸福にはなることはできない。多くの人々は、全世界的に友愛が広まった後には苦しみも消滅すると考えているが、キリスト教はそうは教えておらず、むしろ苦しみは存在し続ける。「苦しみがなくなれば、信仰も、神への信仰に基づいた人々への愛も存在しなくなるだろう」²⁹。人々の全般的な幸福という考え方はヒューマニズムであり、キリスト教ではない。あくまでも個人の魂の救済を教えるのがキリスト

²⁶ ロシアの政治家、保守思想家（1827-1907）

²⁷ 『ドストエフスキー全集』第17巻 p. 532

²⁸ 清水昭雄「「すべての人々が愛し合う世界は可能か—ドストエフスキー vs K. レオンチェフ」 pp. 77-78

²⁹ Константин Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 316

教であり、世の人々は勘違いをしているのだとレオンチェフは主張している。そして、悪や苦しみは世の中に存在し続けるのであれば、信仰は畏れから始まるのが自然である。「叡智（つまり、真の信仰）の始まりは畏れであり、愛はその成果にすぎない」³⁰。苦悩が続くからこそ、神への畏怖や教会を愛し服従する行為が発生するというのが、レオンチェフの基本的な見解だ。

ソロヴィヨフやベルジャーエフは、レオンチェフの発想が、ニーチェの思想と類似していることを指摘している。レオンチェフにせよニーチェにせよ、人道主義的で平等主義的な西欧のキリスト教に対する批判の根本には、凡俗な人々を生み出してしまうという美学的な拒否反応があったからだ。ニーチェは無神論者であり、レオンチェフは正教を信仰していたため、表面上はまったく思想的に異なるように思われるが、多様性の美学に基づき、平等主義を克服する事に対して、宗教の助けを借りたかどうかの違いであり、発想の方法は似ているのだ。前述した、ドストエフスキの「異教」的な印象は上記の発想を受けて生まれたのだろう。

レオンチェフの思想は、平等・均一という状態を好まず、多様性や変化に富んだ状態をよしとする美学が中心となっていた。この美学から、身分制などの制度が存在する社会、つまり差が歴然とある社会をよいものとして賞賛する歴史観や、万人が不幸や苦しみから解放されるような世界は存在しないと考える宗教観が派生したのである。

2-2. 思想の背景

ここからは、前節まで述べてきたレオンチェフの思想を、より広い文脈のなかでとらえるため、レオンチェフがどのような境遇に生まれ、どのような環境で育ってきたのかをみていこう。

レオンチェフは、1831年、モスクワから南西へ約180キロの位置にあるカルーガ州クディノヴォ村に生まれた。父は同地域に領地を持つ地主貴族だったが、夫婦仲が悪く別居していたため、レオンチェフとの交流はあまりなかったようだ。³¹逆に母親との仲は深く、影響も大きかった。母もまた貴族の出身であり、信仰深い母は、レオンチェフをつれて近くのオープンチナ修道院へ行くなどしていた。「私は母を非常に愛しており、非常に同情し、尊敬していた」³²と回想するレオンチェフにとって、母と過ごしたクディノヴォ村の自然、連れ立っていった教会、母の貴族的な性格が一体となって良きものと感じられ、後の美学の形成に役に立ったといえる。後にレオンチェフが乗り気でなかったにもかかわらず医学部に進むことになったのも、母の要望があったからだとされている。その後医学部に進学したことは、生物学的な知識を習得することで、後に自らの美学を発展させる際、3段階の発展法則などの基礎となる着想を得たことから、レオンチェフの世界観にとって重要な意味をもった。

レオンチェフが執筆活動を行おうと考えたのは、1857年、クリミア戦争から帰還して軍医を

³⁰ 同上 Стр. 315

³¹ 『ロシア「保守反動」の美学-レオンチェフの生涯と思想』 pp. 36-37

³² К.Н. Леонтьев Сдача Керчи в 55-м году (Воспоминания военного врача)
http://dugward.ru/library/leontjev/leontyev_sdacha_kerchi.html

辞めた後のことである。ロシアでは、クリミア戦争敗北の影響で、社会改革を望む機運が増し、アレクサンドル2世が農奴制をはじめとするロシアの旧弊に手をつけはじめた頃であった。同時代人の知識人が西欧派とスラブ派に分かれて論争をしていたことは前述したが、レオンチェフが育んできた美学は、いずれの主張にもそぐわないものであった。専制や正教を重要視するため、レオンチェフは心情的にはスラブ派であったが、完全に一致したわけではなかった。この頃のレオンチェフの思想を、ベルジャーエフは以下のようにまとめ、レオンチェフが孤立していたことを指摘している。

だがその（レオンチェフの：筆者註）思想傾向は、60年代に広まっていた思想とはあまりに異なったものであり、彼は時代遅れで、不必要で、理解しがたいものだった。彼（レオンチェフ：筆者註）は自らの唯美主義のなかで孤独であった。美を重んじる文化は60年代の人々には異質に映った。彼もまたこの時代の自由民主主義的な思想や感覚には馴染みがなかった。1862年に、ついに彼は進歩主義的、自由平等主義的な思想の面影と袂を分かち、保守主義者となる。³³

レオンチェフの孤立の最たる例が1861年の農奴解放への態度だった。西欧派は身分制という遅れた制度を廃止したという理由から、スラブ派は民衆を解放したという理由から、農奴解放令が出された当初はそれぞれ農奴解放を賞賛したが、後に両派とも、解放が中途半端であり、土地を無償で農奴に供与するなどより進んだ政策を求めて、農奴解放令を批判した。

レオンチェフは当初、「今や自由になったロシアの農民や平民は、ロシア流に正しく生きることを、そして我々が主人たらねばならぬことを、我々に教えてくれると思う」³⁴として、良き身分関係を維持するものとしての農奴解放に期待していた。だが、農奴解放は結局、階級をなくし、人々の均一化を図る平等主義という思想にもとづいた施策だったため、相反する美学観を持っていたレオンチェフは当然のことながら失望した。このように、レオンチェフの期待していた農奴解放と、西欧派スラブ派の期待していた解放令への内容は、質的にまったく異なるものであった。

軍医の後は定職に就いていなかったレオンチェフは、試験を受けて外交官になる道を選択した。1863年から外交官として働き始めたレオンチェフは、外交官としてサロニカの領事を勤めていたとき重病を患って、死の淵をさまよった際に神秘体験をし、正教に傾倒するようになる。このことはレオンチェフにとって重要な意味を持つらしく、ローザノフへの手紙で、こう語っているほどである。

要するに、私がおこなった主要なことはすべて、1872年から73年以降、すなわちアトス山

³³ Николай Бердяев, *Константин Леонтьев—Очерк из истории русской религиозной мысли*. Стр. 11

³⁴ Константин Леонтьев *Плоды национальных движений на православном Востоке*
http://knleontiev.narod.ru/texts/plody_na_vostoke.htm

に向かい、個人的な正教信仰に熱情的に惹かれた後のことです。…個人的信仰は、なぜか突然、40歳にして私の政治的、そして芸術的教養を完成させました。このことは依然、私を驚かせますし、神秘的で理解しがたいことなのです。³⁵

神秘体験ののち、レオンチエフは1873年、外交官をやめ、政論家として職を転々としながら活動することになる。1873年には『ビザンチズムとスラブ民族（ВИЗАНТИЗМ И СЛАВЯНСТВО）』という代表的論文を書き上げる。ところが思想界はレオンチエフに反応をみせることはなかった。それどころか、『ビザンチズムとスラブ民族』は、保守派の論客であったジャーナリストのミハイル・カトコフに、《ロシア報知》誌（1856-87）への掲載を拒否されてしまった。レオンチエフの歴史観によれば、ロシアは第2次単純化、つまり衰退の時期にあり、その流れは不可避であるという主張は、愛国者であったカトコフには受け入れられなかったのであった。

孤立したレオンチエフは次第に極端な主張を展開するようになり³⁶、ますます注目される事はなくなっていった。そのうちに病弱であった体の調子が悪化し、死を悟ったレオンチエフは修道士となって一生を終えた。1881年に即位したアレクサンドル3世が極端に保守主義的な政策をおこなっていることに、わずかながらの望みをかけていたところでの死だった。その後帝政は崩壊の一途をたどり、結局レオンチエフの思想は実現されないままとなった。

2-3. レオンチエフ思想の予見性

本節では、レオンチエフがブルジョワ的な俗物精神がもたらす平等化を嫌い、それへの対抗としてビザンチズムという概念を生み出したことについて考えていきたい。

2-3-1. 特異な平等思想

本章ではここまで、レオンチエフの言う「平等」という概念をあまり詳しく検討してこなかった。レオンチエフが平等を批判するとき、何を指していたか、そしてなぜ平等を批判していたのか、以下で考えていこう。

現代社会で考えられている平等という概念を考える際、福沢諭吉の議論が参考になる。福沢諭吉は『学問のすゝめ』（1872-76）で、人が平等であるということを「有様」と「権理通義」という言葉で整理している。ここでいう「権理通義」とは、法的政治的権利のことと考えていいだろう。

³⁵ Константин Леонтьев Избранные письма В.В. Розанову

http://knleontiev.narod.ru/texts/pisma_rozanovu.htm#a

³⁶ たとえば「プーシキン記念祭におけるカトコフとその敵」という文章では、「極端でいいではないか！」と聞き直つてすらいる (http://knleontiev.narod.ru/texts/katkov_i_vragi.htm)

同等とは有様の等しきを言うに非ず、権理通義の等しきを言うなり。(中略) 地頭と百姓とは、有様を異にすれどもその権理を異にするに非ず。(中略) この権理に至っては地頭も百姓も厘毛の軽重あることなし。³⁷

つまり、社会に平等という思想が広まったからといって、人々の「有様」を一様にするわけではないのである。考えてみれば当然で、世の中には金持ちもいれば貧乏もあり、力の強い人弱い人がある。平等と多様性は矛盾しないのだ。では、なぜレオンチェフはそれでも平等が差異を無化していくものであるとして批判したのだろうか。

ここでもう一つ理解を助けると思われる議論を取り上げよう。フランスの政治家アレクシ・ド・トクヴィルは、有名な著書『アメリカのデモクラシー』(全2巻、第1巻は1835年、第2巻は1840年刊行)において、なぜアメリカには民主政治が根づいているのかについて考察している。そのなかでトクヴィルは、デモクラシーとは、民主的な制度を導入するというよりも、社会に諸条件の平等 (l' égalité des conditions) という考え方が浸透しているということが重要であるということを見抜いている。どういうことか。

トクヴィルによれば、社会が平等化する前、人々は身分的なものや制度を自明であると捉えていた。裏をかえせば、平等化とは、諸身分を自明とはとらえず、むしろ不自然なものとして捉えるようになる現象のことである。人々に与えられた前提条件は平等であるという、平等についての想像力が変化した社会を、平等社会と呼ぶべきではないか。たとえ実際の社会が経済的不平等などの差異に満ちていたとしても、上記のような想像力の変質がおこっていれば、平等社会と考えるもさしつかえない。皆が一様であるのが当然という、平等についての考え方の変化が、民主的な政治制度の下地になっている。そして、その変化は今後の世界の趨勢になっていくだろう。トクヴィルはそう考えた。³⁸

レオンチェフは、トクヴィルの言う、平等に対する想像力の変化を、当時のロシア社会から読み取ったのではないだろうか。平等理念は人々の「有様」を変えはしないものの、それまで当たり前であった階級や秩序が疑問視されるきっかけとなる。これは、人々の意識そのものが変わロシア社会の階級や秩序を崩壊に導く、危険な変化であった。だからこそレオンチェフは、皆が一様になりたがる平等社会に危険性を嗅ぎ取り、時代に逆行して平等を批判したのではないだろうか。

トクヴィルは、平等社会において、互いを同等の存在と捉える中産階級の市民が社会の中核になろうと予見した。レオンチェフは、ブルジョワを、卑俗的で、皆と一様になりたがる存在として憎んでいた。レオンチェフのいうブルジョワとは、単に富裕層をいうのではなく、トクヴィルの「中産階級の市民」と同様の意味と解釈したほうが分かりやすい。レオンチェフはトクヴィル

³⁷ 福沢諭吉『学問のすゝめ』pp. 23-25

³⁸ 詳しくは、トクヴィル研究者である宇野重規の『トクヴィル 平等と不平等の理論家』第二章を参照

と似た考えをもって、18 世後半以降の西欧からの影響を、ブルジョワ的な俗物根性の流入として批判したといえるだろう。レオンチエフと同時代を生きたロシアの知識人は、平等を権利における平等と捉えていたため、レオンチエフを理解できなかったのではないかと筆者は考えている。

2-3-2. ビザンチズム

差異を美とするレオンチエフは、人々の考え方の変化に対抗するために、そして、これからまだまだ発展する余地のあるロシアを守るため、ビザンチズムという概念を編み出した。レオンチエフはビザンチン帝国、つまり東ローマ帝国（395-1453）の文化や制度を高く評価し、今後のロシアの手本とすることを考えたのである。では、ビザンチズムとはなんだろうか。レオンチエフは以下のように説明している。

国家におけるビザンチズムとは、専制を意味している。宗教におけるビザンチズムとは、西欧の教会、異端、分離派とはちがった特徴を備えるキリスト教のことである。また道徳の世界におけるビザンチンの理想は、ドイツの封建制度が歴史のなかへ持ちこんだような、現世の人間の人格という高遠で、多くの場合誇張された概念をもってはいない。また、現世のすべてのものや、幸福、私たちの純粋さの不変性、この世で道徳的な完全さに向かう我々の能力などにたいして、ビザンチンの理想は幻滅しがちである。またビザンチンの理想は、諸国民の普遍的な幸福というものについて、いかなる希望も拒絶する。それは、地上における万人平等、万人自由、万人幸福—という意味での普遍的人類なる理念にたいする、もっとも強力なアンチテーゼでもある。³⁹

レオンチエフの思想が凝縮された文である。強烈な個性をうみだすためには、専制や正教のヒエラルキーが存在することが重要であり、つまり社会のなかに差異を深める制度を根付かせることが重要だった。レオンチエフにとって、ビザンチズムこそが、美を破壊する力と戦うことができ、複雑性を維持できる唯一の防御力であった。

ところが、現実にはトクヴィルの予想が的中した。ロシアにも互いを平等な存在とみなす考えは広がり、皇帝による専制は批判にさらされていった。レオンチエフは、その潮流が不可避であり、時間が経過すればするほど多くの人々がブルジョワ化することを予感していた。この諦観のなかで、レオンチエフはロシアを腐敗から守ろうといった扇情的な表現で強力な専制を擁護した。

我々は、ロシアがまだ西欧の流れから身を引き離すことができると信じる勇気を持っていると考えている…依然としてロシアの護衛者の力とロシア精神の新鮮さを信じているのだ！

³⁹ Константин Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 127-128

ここでレオンチェフに葛藤が生じていることが分かるだろう。レオンチェフの歴史観によれば、国や社会等の有機体は3段階の状態をたどるのだった。ならばなぜ、自然法則の流れのもと、ロシアが無個性になりゆく第3段階に入ったことを容認しないのだろうか。筆者は、レオンチェフが発展法則という「自然科学的な」流れに服従するか、それともそれに反抗するかで終始迷っていたと考える。

だが、レオンチェフは最終的に、ロシアを凍結せよという主張に傾いていった。つまり、まだ西欧の文明に浸りきっていない無知な農民たちをそのままにしておくという発想であった。それは、哲学者のトマーシュ・マサリクが以下のようにレオンチェフの主張をまとめているとおりである。

無知がロシアの幸福である。(中略) インテリゲンチヤが農民から学ばねばならないのであって、その逆ではない。そのためには人民を愛する必要はなく、(中略) 一原理において人民と一体化しなければならない。⁴¹

レオンチェフは、逆に言えば、「無知」でないと考えられる人々が増加していくことを的確に捉えていたということである。教育を受け、法的権利も平等であり、それを当然のことだと考える人々が増えること、これは大衆社会化の現象であり、レオンチェフはその流れを憂いたのであった。大衆とは、はじめに述べた通り、匿名的で、無責任な集団の意味である。そのために、まだ毒されていない存在として民衆＝農民を捉え、その思想を保持することに腐心したのである。

ベルジャーエフは、レオンチェフのペシミズム的な宗教観を評して「暗黒のキリスト教」と言っているが、同時に新しい価値観を生み出そうとしたことは評価している。筆者は、この新しい価値観とは、不可能と知りつつも自然的な法則に抗い、平等社会のなかでも、差異を生み出す制度をもとに多様な社会を目指すというものだったのではないかと考えている。レオンチェフは、このような視点から評価されるべきである。

次章では、大衆社会化の流れに逆らわず、むしろ西欧の文明とロシア民衆の伝統をうまく組み合わせることによって新しい政治思想を生み出そうとした作家、ドストエフスキーの思想を追ってみていこう。

3. ドストエフスキーの民衆観と政治思想

⁴⁰ Константин Леонтьев, *Восток, Россия и Славянство*. Стр. 417

⁴¹ トマーシュ・マサリク『ロシアとヨーロッパ ロシアにおける精神潮流の研究〈Ⅱ〉』石川達夫/長興進訳、成文社、2004、p. 197

本章では、『作家の日記』にみられるドストエフスキーの民衆観、政治思想について論じる。『作家の日記』は、ドストエフスキーが、偉大な小説作品を書いた作家であることとは別に、つまらない反動主義者として批判されることになった最大の原因である作品であり、まただからこそ、小説とは異なりドストエフスキーの思想、特に民衆観がより明瞭に読み取れる。はじめに、『作家の日記』とはどのような作品であるかを示し、反動的だとされる理由や独特の民衆観が見られるという事実を見ていこう。

3-1. 『作家の日記』と民衆観

『作家の日記』（以下『日記』とする）は、1873年、1876年から1877年、そして1880年から1881年にかけて書かれた政治・社会評論の集成である。1873年の文章は、ドストエフスキー自身が編集長を務めていた週刊誌『市民（Гражданин）』において、「作家の日記」という連載枠に発表されたものである。『市民』で1年間連載された後、『作家の日記』は、1876年からドストエフスキーが自費刊行した雑誌『作家の日記』に引き継がれ、『カラマーゾフの兄弟』の執筆のための中断をはさんで死の直前まで書き続けられた。

『日記』が書かれる直前の1861年に、農奴解放令が出されていることは何度も述べてきた。逆に、ドストエフスキーが『日記』を農奴解放令直後に書き始めたことは偶然ではない、ともいえる。まさに『日記』が書かれる時代は、アレクサンドル2世の一連の改革の影響が出始め、社会が大きく変動していた時期であり、またサン・ステファノ条約で終結する露土戦争(1876-1877)がおこなわれた時期に重なってもいた。『作家の日記』の内容も、社会の大変動や時事問題に大きな影響を受けている。

『日記』には、時事問題と並んで、民衆についての著述が非常に多い。2つ例を挙げよう。

民衆についての問題、民衆をどう見るか、民衆をどう解釈するかという問題は、わが国の未来のすべてが含まれている、現在のわが国で最も重要な問題であり、いわば、現在のわが国の最も実際的な問題であるとさえ言うことができる。⁴²

民衆には理想があるか、あるいはそんなものはぜんぜんないのか—これこそわれわれにとって生か死かの問題なのだ。⁴³

以上の文章を見るだけでも、ドストエフスキーが民衆を重要視していた事が分かる。『日記』にはこのほかにも、「民衆」という言葉がいくつ出てきたか分からないほど、民衆について論じら

⁴² フョードル・ドストエフスキー『作家の日記（2）』小沼文彦訳、ちくま学芸文庫、p. 128

⁴³ 同上、p. 218

れている部分が多い。1876年2月号の第1章2節のタイトルなど、そのまま「民衆に対する愛について」である。『日記』は、同時代において民衆という存在が社会の中でクローズアップされたこと、また、ドストエフスキーが民衆を重視したことをはっきりと表しており、ドストエフスキーの民衆観が明確に表れた作品であると言える。

3-2. 監獄体験と民衆観の変化

ドストエフスキーは、軍医の父と商人の娘である母との間に生まれた。一応貴族の家に生まれたといっている。当時のロシアは階層社会であり、貴族とそうでない人々との間には大きな溝があった。農奴解放令の後も、その溝はほとんど埋まることはなかった。ドストエフスキーは、おそらく「民衆」の側には属していなかった。『日記』にも、自らを含めたロシア社会の上層階級の人たちを、「民衆にとっては外国人も同様で、とても同じロシア人とは思われないような奇妙な人たち、一これまで民衆が「ご主人」と呼び慣れてきた人たち」⁴⁴と述べている部分がある。ドストエフスキーがいう民衆とは、自分とは異なった存在、他者であったことが分かる。⁴⁵

ドストエフスキーは、自分とは異なる存在としての民衆とどう関わっていたのか。その重要な体験となったのが監獄体験だ。『日記』にみられる民衆観が形成される要因となった、ドストエフスキーの監獄での体験についてみていこう。

ドストエフスキーは、1849年に逮捕され、刑罰を受けるという体験をしている。この一連の出来事はペトラシェフスキー事件と呼ばれ、空想的社会主義を標榜していたペトラシェフスキーのグループが摘発されたものだった。グループの一員で危険思想をもつと判断されたドストエフスキーは死刑判決を受けるが、刑の執行直前に恩赦になり、シベリア流刑となった。

1850年からの4年間を徒刑囚として過ごすことになったドストエフスキーは、その監獄体験から『日記』の著述に通じる様々な民衆に関する着想を得た。ドストエフスキーの民衆観について考えるうえで、監獄体験が非常に参考になる理由がここにある。服役時には周囲にあらゆる階層の人々がおり、しかも犯罪を犯すような最下層の民が多く、ドストエフスキーの特異な民衆観の原型が形成されたときであるといえるからだ。

オムスクにあった監獄は、ドストエフスキーにとって民衆との接触の場であった。ドストエフスキーはそのときの体験を『日記』の中でこう語っている。

わたしを取り囲んでいたのはまさに、ベリンスキーの信念によれば、それぞれ犯罪をおかさずにはいられなかった人たちであり、したがって、実際には罪はなくただほかの人たちよりは運が悪かったにすぎないのである。ロシアのすべての民衆がやはりわたしたちを「不幸な人たち」と呼んでいることを、わたしは知っていたし、わたしたちをそう呼ぶのを何度

⁴⁴ 『作家の日記 (3)』 p. 195

⁴⁵ のちに取り上げる『死の家の記録』でも、民衆である囚人たちと、貴族である主人公ははっきりと区別されており、ドストエフスキーの民衆観が表れている

となく大勢の人の口から聞いたことがある。しかしそこにはなにか別な、ベリンスキーが言ったのともちがえば、またたとえば、最近この国の陪審員たちがぐだす判定などによく見受けられるのともぜんぜんちがう、微妙な差異があった。この「不幸な人たち」という言葉、つまりロシアの民衆のくだした判決には、それとは別の思想の響きを感じられた。四年間の徒刑生活は思えば実に長い学校であった。わたしは十分に確信を固める時間を与えられたのであった…⁴⁶ (傍点原著)

ドストエフスキーがその「長い学校」で得たものとは、民衆に対する思いの変化であった。この変化を考えると役に立つのが、ドストエフスキーの監獄体験をもとに書かれた作品である『死の家の記録』(1861)だ。『死の家の記録』では、あらゆる民衆のなかでも最下層の人々とともに生活する主人公が描かれている。主人公はこの生活の中で、民衆という存在を、自らにとつて、さらにはロシア社会にとって重要なものであると認識するようになる。『死の家の記録』から、民衆に言及した部分を取り上げてみよう。『死の家の記録』の主人公の言葉は、作者ドストエフスキーが監獄で考えたこととほぼ同じだったと考えられる。

わたしは、もっとも教養の低い、もっとも虐げられた階層のこれらの受難者(筆者註:徒刑囚)たちの間に、精神のもっとも緻密な発達のあらわれを認めたということを、真っ先に証言することをほばからない。⁴⁷

彼ら(旦那:筆者註)は一般民衆とは底知れぬ深淵によってへだてられているのだが、旦那が不意に、外的な事情によって実際にこれまでの自分のいっさいの権利を失い、一般民衆になりさがったときに、はじめてそれがすっきりわかるのである。たとえ一生のあいだ民衆とまじわっていたとしても、それは埋められない。⁴⁸ (傍点原著)

ここでは、ドストエフスキーが民衆といかに隔たっていたかという経験が率直に語られている。ドストエフスキーのような貴族出身のインテリと、読み書きすら覚束ない民衆との間のへだたりがはっきりと可視化される空間が、監獄であった。

19世紀半ばのロシアでは、民衆は無知な存在と思われていた。ロシアに西欧の知識や技術が次々と伝わる中で、ロシア社会の「遅れ」が知識人層に認識されるようになった。そこで槍玉にあげられたのが民衆であった。教育をうけておらず、暴力と酒だけが気晴らしの農民たち。彼らを変えねば、ロシアの未来はない。そういったイメージが広まっていたのである。

また、その一方で、知識人階層には民衆とつながっているという思いもあった。第1章で述べ

⁴⁶ 『作家の日記(1)』 p. 29 ベリンスキーは社会主義を標榜した文芸評論家

⁴⁷ ドストエフスキー『死の家の記録』工藤精一郎訳、新潮文庫、2004(初版1973)、p. 473

⁴⁸ 同上、p. 476

たように、西欧派もスラブ派も、民衆は私たちの側にあるとして、自らの改革の理念の象徴としていた。西欧派は、自らの主張を実現させるには野蛮な民衆の啓蒙が必要だと考えていたし、スラブ派は土着的な民衆の思想によって西欧思想に対抗しようとしていたからだ。どちらのグループも、我こそは民衆の代弁者なりと自負していた。

ペトラシェフスキー事件に連座したことから分かる通り、ドストエフスキーは社会主義者だったときがあった。社会主義とは、大雑把に言えば、理性を重視し、革命を通して社会を変えていこうとする考え方である。その目的を達成するためには、なによりも社会の大多数を占める民衆を啓蒙することが不可欠だったのである。社会主義者にとっての民衆は、素朴であるものの、抑圧状態におかれ、野蛮な性質をもっている存在であった。これはつまり西欧派の考え方に近いものだった。シベリア流刑になる前のドストエフスキーの民衆観は、野蛮でありつつも、啓蒙すべき大切な存在であるという考えと似たものであったのではないかと推測できる。さらにドストエフスキーは18歳のときに父を農奴に殺されてもいる。下層民は野蛮であるという印象もあったのではないだろうか。

ところが監獄での体験を経たドストエフスキーは、西欧派、スラブ派どちらの思い込みも否定し、民衆を言葉で捉えようとする発想に反対した。では一体、民衆の重要性を感じたドストエフスキーは民衆をどのように捉えたのか。以下では、『日記』の民衆観の特徴を、二つに分けてみていくことにする。

3-3. 真理を追い求める民衆

ドストエフスキーの民衆観の第一の特徴は、民衆は無知ではなく、キリスト教の理念を知識人の誰よりも理解し、真理を追い求める心を持っている、とする点である。

前述の通り、19世紀ロシア社会の知識人にとって、民衆は評価すべき対象ではないことが多かった。西欧派、スラブ派は、前者がナロードニキ運動、後者は土壌主義に代表される思想にみられるとおり、どちらも民衆を理想化していたものの、自分たちこそが彼らを先導する、という意味では民衆を下にみていた。ドストエフスキーも、『日記』のなかで両派の主張、特に西欧派の民衆に対する言説を取り上げて批判をおこなっている。⁴⁹

それでは、ドストエフスキーはどうだったのか。ドストエフスキーは、民衆と接触したことで民衆のことが分かったと述べる。それも、最下層の人と交わり、その人たちと同程度にならされてしまっただけで分かったと書いている。

わたしは民衆を知っている、わたしは民衆のおかげでキリストを、まだ子供の時分に両親の家で知り、ご多分にもれず自分もまた「ヨーロッパかぶれの自由主義者」に変貌したときに、すんでのことに失いかけたキリストを、ふたたび自分の魂の中に受け入れたのである。（筆者

⁴⁹ たとえば、『作家の日記〈3〉』の「時代おくれの人々」などを参照

註：監獄体験のさいのこと）⁵⁰

このように、ドストエフスキーは民衆をキリスト教の真理を追い求める存在として理解した。民衆は野蛮でも何でもなく、むしろ民衆を馬鹿にする知識人よりも真理を追い求める傾向にある。さらに、そんなものは微塵も持たないと思われていた、市民的感情も政治的思想も持っている。⁵¹それは知識人が押し付ける価値観ではなく、知識人たちに見捨てられていたロシア正教の精神に基づくものであった。まず民衆の声や行動に目を向けたドストエフスキーは、民衆の知識を次のように表現している。

学校で習ったことはなくても、民衆は自分たちの神であるキリストのことを、おそらく、われわれよりもずっとよく知っているにちがいない。⁵²

わが国の民衆はキリストとその教えを自分の本質の中に取り入れて、もうずっと以前から文明化されていると、わたしは断言してはばからない。⁵³

ドストエフスキーがどのようにして民衆からキリスト教の精神を読み取ったかについては、断片的ながら『日記』に書かれており、まとめると次のようになる。民衆は墮落している、酒に溺れ、金に執着するという点ばかりみられている。だが、そんななかにおいても、決して彼らはその状況をよしとはせず、常に悩み苦しんでいる。ということは、民衆は理想の状態、「こうであるべき」という道徳的模範を持っている。それがキリスト教の精神ではないか。ということは、民衆は正教の精神を忘れておらず、それこそが民衆の理想、思想であるといえる。知識人は、この思想にこそ目をむけ、正教についてもっと知らなければならない。

以上のような民衆観は、ドストエフスキー自身が持っていた、キリスト教による魂の救済という理念を強く反映していた。しばしば知識人が民衆に理想を投影しすぎであって、実態を掴んでいないのではないかという批判が多かったことは前に述べたが、ドストエフスキー自身も民衆に理想を投影しているのではないかと思わせる要素はかなり強いと言えるだろう。⁵⁴民衆という実体に関して言えば、ドストエフスキーは確かに、他の知識人と比較しても的確に捉えていたかもしれない。だが、民衆の理想を社会に反映させる手段については、模索している様子はあるものの、あまりにも抽象的にしか見いだせていないように見える。詳細な検討は後で述べるとして、

⁵⁰ 『作家の日記 (6)』 p. 77

⁵¹ 『作家の日記 (6)』の1880年8月第1章や第3章を参照

⁵² 『作家の日記 (2)』 p. 333

⁵³ 『作家の日記 (6)』 p. 73

⁵⁴ しかしドストエフスキーは『作家の日記 (2)』のなかで、「民衆のファンであるわれわれはすべて、民衆をひとつの理論として見ているのであって、どうやら、実際に現在あるがままの姿の民衆を愛している者は、われわれの中にはそれこそひとりもなく、われわれがそれぞれ心に思い描いている民衆を愛しているにすぎないような気がする」(p. 128)とも述べている

次にもう一つの特徴を挙げてみよう。

3-4. 民衆と知識人層の乖離

ドストエフスキーの民衆観にみられる2番目の特徴としては、民衆があまりに知識人と乖離してしまい、知識人から遠いところに位置している、という強い意識が挙げられる。前述の通り、知識人は、民衆について、そしてロシア正教という民衆の理念についての知識が欠如しているというのがドストエフスキーの持論であった。知識人層は、民衆を理想化することで、逆に民衆を自分たちから遠ざけていたというのがドストエフスキーの主張だった。

だが、民衆側もまた、知識人のことを理解しようともまったく思っていなかった。ドストエフスキーは、民衆にとって知識人など外国人も同様で、同じロシア人とは思われない、と述べている。⁵⁵ドストエフスキーもまた知識人であったため、民衆はあまりに遠い存在であった。『死の家の記録』では、獄中で抗議運動が起こった際に、仲間はずれにされた主人公の、こんな示唆的なエピソードが挟まれている。ちなみに主人公は貴族の出身という設定だ。

『あなた方がわたしたちのどんな仲間なんです？』という彼（囚人：筆者註）の問いには、あまりにも飾らぬ素朴さと、率直な疑惑がこもっていた。この言葉にちよっぴりでも皮肉、憎しみ、からかいがなかったろうか、とわたしは考えてみた。そうしたものは何もなかった。単に仲間ではない、ただそれだけのことである。⁵⁶

ドストエフスキーは、民衆と知識人層の乖離をそのままよしとはしなかった。むしろ、その事態を嘆いていた。キリスト教を基盤とした民衆の思想は、なにもしなければ民衆のなかだけに埋もれて実現されえない、とドストエフスキーは考えていた。その思想の及ぶ範囲を全人類にまで広げ、思想をあまねく世界に広めることがぜひとも必要であり、それこそがドストエフスキーの考える理想の状態であった。乖離していると思われている2つの層を合わさった力にするために、上層文化人は民衆の理念を実現させる駆動力とならなければならなかった。ドストエフスキーの考える上層文化人の役割は、次のような文に見て取ることができる。

ピョートルの改革と同時に比類をみない視野の拡大が現実のものとなった。—そしてこれこそまさに、繰り返して言うが、ピョートルの大偉業のすべてなのである。またこれこそまさにわたしが『作家の日記』の既刊号のひとつの中ですでに言及したことのある、ほかならぬあの貴重な宝であり、われわれ、つまりロシアの上層文化人が、一世紀半にわたってロシアを留守にしていたあとで民衆へのおみやげにしようとしている、また民衆は民衆で、わ

⁵⁵ 註の44を参照

⁵⁶ 『死の家の記録』p. 499

れわれがまず民衆の正義の前に頭をさげたあとで、われわれから sine qua non (必要欠くべからざるものとして) 受け取るべき貴重な宝で、「これなくしては二つの階層の結合は不可能となり、なにもかも滅び去ってしまう」ものなのである。⁵⁷

ここでのピョートルとは、ピョートル大帝のことを指している。ピョートル大帝は、バルト海の覇権をスウェーデンから奪うことで、ロシアを辺境の国家から西欧世界のメンバーに入らせ、また国の制度や仕組みを西欧風に改めた。ロシア社会は、このピョートルの一連の改革によって、ヨーロッパに対して強い関心を持つことになった。

上の引用の「視野の拡大」とは、このヨーロッパへの関心の拡大のことをいうのであろう。理想を広めるときの上層文化人の役割は、ロシアの民衆の、国全体、さらには世界全体への関心を喚起することだとドストエフスキーは考えていたようである。ロシア語に、個人が愛と信仰をとおして結びついた有機的で普遍的な統一体という意味のソボールノスチという言葉があるが、ドストエフスキーはこのような考えを念頭においていたものと考えられる。⁵⁸

3-5. 露土戦争とその解釈

『日記』では、もうひとつ、ロシア国民の「視野の拡大」に関わる出来事が大きく取り上げられている。露土戦争(1876-1877)を中心としたといわれる東方問題がらみのエッセイが数多く掲載されているのである。たとえば、次のような文章がある。

この戦争はわれわれ自身にとっても必要なものなのだ。(中略) 戦争はわれわれが呼吸している、またどうにもならない腐敗墮落と精神的に狭隘な空間になんらなすところなく腰を落ち着けて、息がつまるような思いをしていた空気をさわやかにしてくれる⁵⁹

露土戦争が発生したとき、民衆は、オスマン帝国領内の虐げられたキリスト教徒を助けるという理由で、熱狂的に戦争を支持した。寄付金や義勇軍の運動まで起こり、国もそれを支援した。ドストエフスキーは、一連の戦争を比較的肯定したものとして捉えていた。なぜなら、民衆と知識人の乖離を嘆いていたドストエフスキーにとって、この戦争は「民衆の思想と、また『正教の事業』とに一ロシア社会の最高知識階級、つまりわれわれがすでに民衆からすっかり離れてしまったものと考えていた、ほかならぬこれらの人々の見解のほとんどありとあらゆるニュアンスが、突如として結合してしまった」⁶⁰出来事であったからにほかならなかった。まさにドストエフスキーのいう民衆の理想が体現され、知識人も民衆と一体となったといえる出来事であったの

⁵⁷ 『作家の日記〈2〉』 pp. 521-22

⁵⁸ セルゲイ・レヴィーツキイ『ロシア精神史』第7章を参照

⁵⁹ 『作家の日記〈4〉』 p. 269

⁶⁰ 『作家の日記〈3〉』 p. 144

だ。

『日記』は、従来あまり語られてこなかった作品である。特に、20世紀以降の西欧の知識人たちにあまり評価されてこなかったと言える。戦争に熱狂する民衆を擁護することは、戦争を擁護することに等しいとみなされたからだ。たとえば、国際政治学者として有名であり、ドストエフスキー評論を行ったことでも知られているエドワード・H・カーは、『日記』についてこう述べている。

『作家の日記』もまたドストエフスキーの時評的著作に属するもので、後世にとって大した興味はない。⁶¹

しかし歴史家の渡辺京二は、こうした説に反論し、ドストエフスキーが露土戦争を熱狂的に支持する民衆を擁護していたのは、戦争そのものを擁護するためではなく、民衆のうちにある何か根源的な衝動を擁護するためなのだと主張している。

ドストエフスキーは、『日記』で、「逆説家」という人物を登場させてこう語らせている。一般民衆は、「精神的不平等のどうにもやりきれない感情」をもっており、彼らをどんなに解放してやっても、「現在の社会の人間の不平等は決してなくなるものではない」。そのための唯一の薬は戦争である。戦争は、「戦闘の最中にあらゆる人間を平等に」するからだ。⁶²以上の部分を抜粋し、渡辺は次のように述べる。

彼（筆者註：ドストエフスキー）は戦争という行為そのもの、巡礼という行為そのものに意味を認めたのではなかった。彼ら（民衆：筆者註）がさしあたってはそういう愚行の形態で表現せざるをえない彼ら自身の内部の衝動に意味を認めたのであった。⁶³

つまり、民衆は、政治的自己実現を可能にするシステムを与えられていない以上、戦争という、自己復権手段にたよらざるをえなくなる、というのだ。ドストエフスキーも、義勇兵や寄付などの熱狂した動きについて、「わたしは褒めてもいなければ、そしてもいけない。わたしはただそれによって多くのことを説明することのできる事実を確認しているにすぎないのだ。われわれのあいだにそのような歴史的特徴が見られるのであるから、どうにも致し方がないではないか？」⁶⁴と述べている。渡辺の解釈が妥当であることを裏付ける発言である。

上記の考察を発展させていこう。ドストエフスキーの時代、民衆は政治的自己実現の回路からは最も遠い存在であった。啓蒙を基盤とした西欧民主主義は、こうした民衆に知識を上から与え、

⁶¹ エドワード・H・カー『ドストエフスキー』、松村達雄訳、筑摩叢書、1968、p. 253

⁶² 『作家の日記〈2〉』p. 369

⁶³ 『ドストエフスキイの政治思想』p. 146

⁶⁴ 『作家の日記〈5〉』pp. 144-145

ひきずりこむかたちの政治思想しか思弁し得なかったことが最大の弱点であった。ドストエフスキーは民衆をひきずりこむかたちではない、はじめから包摂されているかたちの政治思想を模索していたと考えられる。民衆の合理的ではない面、ここが政治に組み込まれていない以上、真に全民衆が参加している政治形態とはいえない。だからこそ民衆は、自己を回復しようと、自らへの政治的回路が開かれる、戦争という現象を熱狂的に支持するようになってしまうのだ。しかしドストエフスキーは、それをどう実現するかという構想を明確にできず、結果ロシア民衆に注目するという形でしか筆を進めることが出来なかった。

ジャーナリスト的感覚を備えたドストエフスキーは、民衆が主役になる大衆社会を予見していた。だからこそその民衆の理念を重視し、知識人と民衆との解離を嘆き、戦争を支持することでしか民衆がその理念を表明できない状況を一步進めようとしていたのではないだろうか。ドストエフスキーが目指したのは、人々が統合され、理念を追い求めることができる環境を言説によってつくることであった。

4. 20世紀以降の展開と両者の思想の先見性

ここでレオンチェフとドストエフスキーの思想を並べて検討しよう。レオンチェフとドストエフスキーの思想は、反動的で単なる体制擁護だと考えられていた。しかし、両者の思想は、社会の大衆化（俗物化）の進行の影響で、宗教的精神か、俗物的精神かという対立が問題になっていることを前提とし、さらに、民衆を西欧的俗物精神からの砦として彼らに期待し、内実は異なるにせよ、インテリ層は民衆から学ばなければならないという点で、共通して先見性のあるものだった。俗物精神が蔓延する社会において、レオンチェフは多様性のある社会を目指し、差異を生み出す制度としての階層的身分による統治を望んだ。対してドストエフスキーは民衆と知識人層が統合可能であり、互いを補うことで、より良い政治や社会が実現すると考えた。

両者の主張とも、民衆観や民主主義思想に深く関わるものであった。この「民衆」への着目こそが20世紀においては、ますます重要な意味を帯びてくることになる。20世紀以降の政治思想において、民衆は大衆という政治主体として捉えられるようになっていくのである。本章では、20世紀以降の政治思想における民衆観と民主政治との関連について考えていく。まず、第一次世界大戦以降の状況から述べていこう。

4-1. 第1次世界大戦と民衆観の変化

第1次世界大戦は、各国に様々な影響を及ぼした。西欧諸国は総力戦によって荒廃し、オスヴァルト・シュペングラーが『西洋の没落』（1918, 1922）を著すほどであった。さらに、ロシアでは革命が起き（1917）、世界初の共産主義国が誕生した。参戦各国は、自国内の革命を防止するため、さらには戦争に協力した見返りとして、選挙権を拡大させて対応した。1918年にはイギ

リスで男子普通選挙が実施された。1919年のドイツ共和政においては、世界初の完全普通選挙が実施された。アメリカでは女性参政権が認められ（1920）、日本でも普通選挙が実施（1928）されることになった。

20世紀の政治の特徴として、多くの人々が政治に参加してくる——具体的には社会運動や投票行動などに関与する——ことが非常に多くなったこと、そしてその結果として新たに世論というパワーが出現したということが挙げられる。第1次世界大戦とロシア革命は、そのきっかけとなった出来事であった。

その後の時代の民衆への考え方をあらわす著作として、オルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』（1929）と、ウォルター・リップマンの『世論（1922）』が挙げられる。どちらも第1次大戦後に書かれた本であり、当時の知識人の動揺、そしてなによりも民衆観の変化を窺い知ることができる。

オルテガは『大衆の反逆』のなかで、自らの様々な権利をさも当然のように主張し、義務には関心を持たない「慢心しきったお坊ちゃん」として大衆を描写している。繰り返すが、大衆とは匿名的集団で、しばしば無責任だと捉えられる存在であった。この大衆という存在が、ようやく政治の問題として浮かび上がってきたのである。

オルテガは、この大衆の政治参加という状況を、従来の「貴族」がおこなっていた政治の危機として示している。ここでいう「貴族」とは特権階級のことではなく、「つねに自己を超克し、おのれの義務とおのれに対する要求として強く自覚しているものに向かって、既成の自己を超えてゆく態度を持っている勇敢な生」⁶⁵と同義であるとオルテガは述べている。その反対が、「静止したままで自己の中に閉じこもり、外部の力によって自己の外に出ることを強制されないかぎり永遠の逼塞を申し渡されている生」であり、オルテガは、この生を生きる大衆に政治が委ねられた状況を痛烈に批判したのであった。

また、リップマンの『世論』においては、曖昧で感情に流されやすい世論という政治パワーの登場が細かに記されており、世論が民衆の政治的意思決定過程に深く食い込んでいるという現状が描かれている。リップマンは、人々が討論を通じて合意を形成していくリベラルデモクラシーが危機に陥っているという思いを強く抱き、その状況をどう克服するかということに主題をおいていた。つまり、あやふやですぐに変化してしまう大衆の考えを基にした世論に介入される政治では、民主主義は成り立たないとリップマンは考えたのだった。

オルテガもリップマンも、第1次大戦の経験を通じて、合理主義では捉えきれない政治的アクターの登場をかなり否定的に著述している点で共通している。あまりにも多くの犠牲を出した大戦の苦い経験から、リップマンら知識人は、従来のように、多くの人々（民衆）を啓蒙して政治に参加させようという政治思想の問題点に気づいたのである。では、このような知識人たちはどのようにこの「危険な」状況を乗り越えようとしていたのか。オルテガは、人々が過去という経

⁶⁵ オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』神吉敬三訳、ちくま学芸文庫、1995、p. 91

験、すなわち歴史意識を醸成し、政治をおこなうにふさわしい主体となることを提唱した。リップマンは「われわれが現在もっている理性が前進できる速度は、行動が起こさなければならない速度より緩慢である」⁶⁶と述べ、理性の能力をより高めることが大切とした。両者ともに、やはり理性に重きを置いている点では共通している。

4-2. 20世紀以降の政治思想の問題

第1次世界大戦によって露見した民衆観の欠陥を受けて誕生した、民衆の理性を成長させるかたちの政治思想は、20世紀を通じて唱えられてきた。たとえばドイツの社会学者ユルゲン・ハーバーマスは、その主著『公共性の構造転換』のなかで、近代の市民が、コーヒーハウスやサロンにおいて対等に議論し合ったことを「公共圏」と呼び、それが世論に発展して政治に影響を与える過程を重視した。これをハーバーマスは「政治的公共圏」と呼び、「《政治的公共圏》は、国民からなる公衆がおこなう討議をつうじた意見形成や意思形成が実現しうるためのコミュニケーションの条件を総括するものであり、それゆえ、規範的な側面を内蔵した民主主義理論の根本概念にふさわしい」⁶⁷と述べ、以前の政治思想では重視されなかった市民同士の討議を尊重した。

以上の議論に共通していることは、どれも民衆が政治を担う存在としてあまり的確ではなく、あくまでインテリ化（オルテガの言葉で言えば貴族化）することではじめて政治主体となれるという考えが通底しているところである。

だが、理性を偏重し、一貫性を持った人間同士による民主政治には限界があり、それははじめに述べたとおり、現代の実際的な問題となっている。ここで、レオンチエフとドストエフスキーの問題意識がよみがえってくる。理性を持った平等な人同士による討論、意思決定が政治の基盤におかれていることには限界がある。民衆を合理主義へと引き上げることの限界を感じていたからこそ、たとえばドストエフスキーは従来の政治思想を「民衆という根源から分離」していると批判し、レオンチエフは民衆に政治を担わせる民主政治を批判しえたのであった。筆者はここに、両者の先見性を感じるのである。

レオンチエフとドストエフスキーに見られた知識人層と民衆の乖離という問題意識は、当時においては具体化が難しかったが、21世紀の現在、特にドストエフスキーの知識人層と民衆の統合という観点から実現可能にできるのではないかと筆者は考えている。東は、『一般意志 2.0』のなかで、熟議—つまり前節の言葉を用いれば、人々の合理的な討論を通じた民主主義—だけを想定した政治は限界に達していると述べ、むしろそのような合理主義的な面だけでなく、人間の無意識のような、従来は可視化できなかったものを政治の合意形成に組み込もうという新しい民主主義のありかたを提案している。

まず東は、ルソーの概念である「一般意志」を検討している。「一般意志」とは、その社会の

⁶⁶ ウォルター・リップマン『世論（下）』掛川トミ子訳、岩波文庫、1987、p. 279

⁶⁷ ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』第二版、細谷貞雄訳、未来社、1994、p. xxx

構成員が共有する意志を表している。東は、この概念が、ルソーの時代には単に議論を進めるための仮定にすぎなかったものであったのに対し、情報技術革命が進む現代では、仮定ではなく具体化できる理念だと主張している。東の言う「一般意志」はルソーの理念であるが、筆者はここにドストエフスキーの思想に通底するものを見る。東は、従来の民主主義に代わる新しい回路を提唱しているのである。

東は、従来の民主主義が「政府を、市民が明示的な意志表示に基づき運営」するという考え方もっていないことを批判している。そのため、それ以外の新しい民主主義を提案する。

政治の危機の本質は、社会が複雑になりすぎて、熟議への参加コストが跳ね上がってしまったことにある。(中略) 無意識民主主義の提案は、そのあまりにも高くなった政治参加のコストを、劇的に下げることが目的としている。(中略) 大衆も「感想」を漏らすくらいはできる。それも、肯定か否定かを叫ぶだけではなく、もう少しニュアンスの伴った、複雑で多様な感想を発することはできる。⁶⁸

ハーバーマスのような、討論によって意見をすり合わせるという合理的な政治過程ではない、別の民主主義のあり方を提示しているのである。

ドストエフスキーもまた、合議制の民主主義の限界を指摘していた。ドストエフスキーは、西欧からの借り物にすぎない合理主義の政治が回収できない民衆のなかにある思想を、新たな政治制度に変えることで、政治過程に取り込むことを主張していたのではないだろうか。つまり、民主主義という民衆を政治参加させる思想には賛成なもの、既存の西欧の制度では、まだ民衆の意志の反映が不十分であると考えていたのではないか。このドストエフスキーと東の思想の類似性は、ドストエフスキーが現代にも通じる危機を直感していたことを示しているといえる。

『一般意志 2.0』の考えのヒントになっているのはフロイトの無意識の考え方であるが、ここにもドストエフスキーの思想との関連性を見いだすことができる。フロイトは『夢判断』(1900)において、夢は抑圧された欲望が通常とは異なる回路を通して発露したものであると述べた。普段、人は様々な社会的制約を受けている。これら制約のせいで、叶えることのできない欲望を人は多く抱えている。しかし、夢はこれらかなえられなかった欲望を、本人がコントロールを逃れて無意識のうちに顕在化させてしまう。その作用は、人の精神を安定させるものでもある。

従来の西欧政治思想は、人が野蛮な本能しかない状態から、合理的な判断が可能な理性を獲得していくという段階を辿るものであった。ところが、フロイトはその回路を破綻させてしまったのである。どれほど努力しようが、自分自身にコントロール不可能な領域があり、しかもそれは人の精神を安定させるという重要な役割を担っていたのである。フロイトは、人間の無意識というものの研究において、理性ですべてを統御する事が不可能である事を証明した。であるならば、

⁶⁸ 東浩紀『一般意志 2.0』講談社、2011、pp. 184-185

合理主義をもとにした政治思想もアップデートされてしかるべきであると筆者は考える。

レオンチェフは、俗物的な精神に浸食されていく民衆に政治を担うことできないと考え、君主や貴族がその任に就くべきであると主張した。ドストエフスキーは、キリストを深く信仰する、戦争に熱狂する、呪術を信仰するといった「非合理」な民衆の実際の姿をつぶさに観察し、政治をおこなうインテリゲンツィヤは民衆の非合理的な側面にも接触しなければならないと考えた。両者は、まったく異なる主張にたどり着いたとはいえ、フロイトに先駆けて、人間の合理主義的でない側面を見抜いていたのだ。⁶⁹二人の政治思想は、現代においてもその問題意識の鋭さを失っていないのである。

5. おわりに

本論は、現代における民主政治の限界を考察することから出発し、従来からのロシア思想史を考察する際の枠組みである西欧派／スラブ派とは別の枠組みを考案して、それを元に、反動的でつまらない思想とされてきたレオンチェフとドストエフスキーの先見性を現代まで通じるものとして検討するものであった。その意図が少しでも伝わっていれば幸いである。本論では掘り下げられなかった問題も多く（たとえばナショナリズムの問題）、今後の筆者の課題としたい。

本論が成るにあたっては、熊野谷葉子先生と研究会の仲間たちにお世話になった。皆様のアドバイスや支えがなければこの論文は書かれなかった。心から御礼を申し上げたい。

【参考文献一覧】

東浩紀『一般意志 2.0』講談社、2011

宇野重規『トクヴィル 平等と不平等の理論家』講談社選書メチエ、2007

カー、エドワード『ドストエフスキー』、松村達雄訳、筑摩叢書、1968

ガセット、オルテガ『大衆の反逆』神吉敬三訳、ちくま学芸文庫、1995

勝田吉太郎「反動思想の一類型-K・レオンチェフの政治哲学-」『京都大学法学会 法学論叢』第68号、1960

『勝田吉太郎著作集』第2巻、ミネルヴァ書房、1993

韓貞淑「コンスタンチン・レオンチェフとロシア文化の独自性論--19世紀後半ロシアにおける耽美主義と政治的反動思想の結合の一形態」崔在東訳『ロシア史研究会』第75号、2004

栗生沢猛夫『図説ロシアの歴史』河出書房新社、2010

坂中紀夫「日記と『作家の日記』—ドストエフスキーにおける自己物語の問題—」『SLAVISTIKA』第27号、2011

⁶⁹ フロイトは「ドストエフスキーと父親殺し」という論文を書いていることから分かるように、ドストエフスキーに深い影響を受けている

- 清水昭雄「K・レオンチェフ研究小史」『ロシア史研究』第57号、1995.8
- 清水昭雄「すべての人々が愛し合う世界は可能か—ドストエフスキー vs K.レオンチェフ」『志学館大学人間関係学部 研究紀要』第25号、2004
- シュペングラー、オスヴァルト『西洋の没落』
- 高野雅之『ロシア「保守反動」の美学—レオンチェフの生涯と思想』成文社、2007
- 高野雅之「コンスタンチン・レオンチェフとドストエフスキイの「プーシキン演説」」『早稲田大学文学部 ヨーロッパ文学研究』第26号、1978
- トクヴィル、アレクシ『アメリカのデモクラシー』松本礼二訳、第一巻〈上〉・〈下〉、2005、第二巻〈上〉・〈下〉2008、岩波文庫
- ドストエフスキー、フォードル『作家の日記〈1〉～〈6〉』小沼文彦訳、ちくま学芸文庫、1997-98
- ドストエフスキー、フォードル『死の家の記録』工藤精一郎訳、新潮文庫、2004（初版1973）
- 『ドストエフスキー全集』第17巻、小沼文彦訳、筑摩書房、1975
- 土肥恒之『図説帝政ロシア 光と闇の200年』河出書房新社、2009
- ハーバーマス、ユルゲン『公共性の構造転換』第二版、細谷貞雄訳、未来社、1994
- 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、1942
- 藤本和貴夫／松原広志編著『ロシア現代史 ピョートル大帝から現代まで』ミネルヴァ書房、1999
- フロイト、ジークムント『夢判断』高橋義隆訳、新潮文庫、1969
- ベルジャーエフ、ニコライ『ドストエフスキーの世界観』斎藤栄治訳、白水社、1978
- Бердяев, Николай. *Константин Леонтьев – Очерк из истории русской религиозной мысли.* YMCA-press, Paris, 1926.
- マサリク、トマーシュ『ロシアとヨーロッパ——ロシアにおける精神潮流の研究〈I〉～〈III〉』石川達夫/長與進訳、成文社、2002-2005
- 御子柴道夫「ウラジーミル・ソロヴィヨフの著書『ドストエフスキイを記念する3つのスピーチ』の欄外に記されたコンスタンチン・レオンチェフの手稿の書込みをめぐって」『千葉大学 言語文化論叢』第6号、1999
- 山川博「レオンチェフとベルジャーエフ」『早稲田大学文学部 ヨーロッパ文学研究』第28号、1980
- リップマン、ウォルター『世論（上）・（下）』掛川トミ子訳、岩波文庫、1987
- Леонтьев, К.Н. *Восток, Россия и Славянство.* Эксмо, М., 2007
- Его же. *pro et contra // личность и творчество Константина Леонтьева в оценке русских мыслителей и исследователей.* антологи. Санкт-Петербург, 1995
- レヴィーツキイ、セルゲイ『ロシア精神史 哲学と社会思想の流れ』高野雅之訳、早稲田大学出版部、1994
- 渡辺京二『ドストエフスキイの政治思想』洋泉社、2012

和田春樹編『ロシア史』山川出版社、2002

【参考 URL】

Избранные письма В.В. Розанову <http://knleontiev.narod.ru/articles.htm> (最終閲覧日 : 2014/1/13)

Сдача Керчи в 55-м году (Воспоминания военного врача)

http://dugward.ru/library/katalog_alfavit/leontyev_k_n.html (最終閲覧日 : 2014/1/13)